

◎年間総括・保護者アンケート・職員の自己評価・第三者委員との話し合いをもとに、保育園の全体的な計画に沿って園評価を行う。

今年新型コロナウイルス感染防止対策を講じながらの保育をみんなで模索しながらすすめてきた一年だった。目に見えないウイルスに対して、どうすれば安全に保育できるのかわからないことばかりだったが、情報を収集し学び合いながら正しい知識を得ることで正しく恐れながら対応してることができた。また、判断に迷う時はみんなで話し合いながら一つ一つ丁寧に進めてきた。今の状況下で何ができるのか、やりたいこと・不安なこと・発想の転換や工夫、それぞれが色々な思いを出し合いながらも「子どものいのちと安全が第一」「子どもにとって大事にしたいことや保育の視点」をいつも軸において、普段の生活をはじめ様々な保育活動や園行事を柔軟に考え創意工夫をしてきた。しかし、諸々の決定に至る経過や園としての思いや考えが保護者にとっては見えづらく、わかりづらかったという意見をもらった。やむを得ない状況であるから仕方のないことと理解はしつつも園の決定に対する疑問があっても直接話す機会が減ってしまった分、互いの思いを共有することが難しくなっていた。必要に応じて運営協にも諮り保護者会とも相談しながらすすめてきたが、保護者会もなかなか集まって話し合えない中で三役がよく頑張ってくれていたのは本当にありがたかった。だからこそ、それらを踏まえてもっと全体周知できるような発信ができると良かった。より丁寧な発信や説明とともに、保護者の思いを聴く姿勢をより一層意識していく。保護者アンケートは今年度は74.5%の回収率、苦情対応は5件あった。苦情に対しては迅速な対応がされ保護者の思いを聴きながら丁寧に対応できた。アンケートに寄せられた意見要望については真摯に受け止めながら園の方針も丁寧に伝えていく。

コロナ感染対策として消毒や換気の徹底や手洗いの励行と健康管理に対する保護者の協力もあり、今年度はコロナ以外の病氣も拡がらず健康に過ごせたことは良かった。コロナ感染拡大防止のための登園制限は状況を見ながらその都度検討していくが、消毒や衛生管理については今後も継続していく。

子どもの怪我や事故は11件あった。転倒や転落による擦り傷、たんこぶが多かったが、3才児男児は躓いて転んだ先がテラスの端で鼻を骨折してしまった。他にも園庭で躓いて転んでコンクリートにぶつける怪我があり、応急処置としては人工芝を敷く等してはいるが、園庭改修が早急の課題である。また、引っ掻きや噛みつきにより何度も傷を負ったり痕が残ってしまったということが何回もあり、保育の手立てを見直すとともに爪のケアについては保護者にも繰り返しお願いしてきた。飛び出しや突発的な行動、衝動性が目立つ子どもについては園全体で共有し危機管理意識を持つようにしてきた。

緊急事態宣言が出された中での新年度スタート。1期はコロナ対応に追われいつものように遊びたくても遊べない生活の中で職員も不安や疲労感でいっぱいだったはずなのに色々な知恵と工夫満載の保育を展開していて、職員たちの力を改めて感じた1期だった。そして、水・泥んこ・感触遊び三昧の夏。プール遊びができなくても全身で思い切り遊べる活動を工夫し、解放感をたっぷり味わいながら一人一人の成長が見られた2期だった。おとまり保育やキャンプ、夏祭りも今までとは違う新たな行事を創る気持ちで取り組んだ分、達成感や充実感を大人も味わうことができ自信にも繋がった。新たな視点で保育を見直す良い学びにもなった。いつもと違うことにもだんだん慣れてきて子どもも大人も楽しさが盛り上がってきた3期、子どもにとってどんな活動・行事にしよう？という視点での保育が充実してきた。クラスごとにホールで行った運動会では、子どもたちがいきいきと楽しんで見に来てくれた保護者の方も前例にない運動会ではあったものの温かく見守ってくれる雰囲気が高く、親子で笑顔になれた運動会ができて本当に良かった。4期のひなまつり会では、保育の集大成として子どもたちの成長をみんなで喜び合いたい思いは職員だけではなく保護者も同様で、開催方法について5才児保護者から意見をもらった。お互いに話をする子どもたちのことを一番に考えた結果であったことを理解納得してもらうことができた。初めての試みで無観客で行ったが、子どもたちは程よい緊張感を持って本番に臨み、どのクラスも当日が最高の姿で一人一人の成長とクラスとしての成長が見られて本当に嬉しかった。

今年の保育実践を通して、改めてこれまでの保育を見直しながら、どんな時でも子どもにとって経験させたいことや育てたい力、保育のねらいは変わらないことを実感するとともに、子どもたちの成長を通して保育の手応えや充実感を実感できた一年だった。“あ～楽しかった”と思える保育に向かってきたからこそ“こうでなければならぬ”に縛られず、心が軽く保育できるようになってきたように感じる。それでもやはり、保育はいつでも悩みながら、もがきながら、うまくいかない・わからない・これでいいのかな…の繰り返しで、とにかく一生懸命に子どもと・保護者と・自分と向き合っていくしかなくて、時にはしんどくも辛くもなり、職員の中に“大変さ”が蔓延しているようにも思う。なんとなく手応えのようなものを感じたり、ちょっとわかってきたような気がしたり、子どもや職員と“楽しい”を共感したり、「なんで!？」と思うことを面白がれるようになっていたりすることを積み重ねていながら大人も葛藤を乗り越えて成長するのだろうと思うが、一人一人だけではなく職員集団として乗り越えていけるよう努力したい。

今までのように集まれない・話せない中で、毎日のお便りやクラスだよりを工夫して保育を視覚化してきたことはとても良かった。しかしこれまで当たり前のようできていたクラス懇談会や入園説明会、職員集会、職員会議、園内研修等ができなかったことで、一堂に会して話したり聴いたりすることの良さを改めて実感したので、今後どのようなやり方なら実施できるのか考えていきたい。